父、[illegible]最期を看取って…

一昨年九月から、誤嚥性肺炎で[illegible]に入院中だった父は、十一月下旬に　病院へ転院。[illegible]では毎日十分程度一人に限って面会ができましたが、転院後はコロナ対応の為、ほとんど会えないまま三ヵ月以上が過ぎていました。その間、知識も充分にない中で、私たちは他の病院や施設を探しておりましたが、なかなか見つからず、在宅看護を考え始めていました。

そんなさ中、中心静脈点滴の管による感染症の高熱にも耐えていた父が、リモート面会で初めて「死にたい」とつぶやき、私たちは大きな衝撃を受けました。あれこれ悩んでいる暇はない、家に連れて帰らなければと、家族みんなで決心しました。

ちょうど、先生のドキュメンタリー映画『けったいな町医者』の上映が始まっていました。事前にご相談のお電話をしておりましたが、舞台挨拶に来られる先生に直接お会いできたらと思い、家族で映画を観に行きました。ドキュメンタリーを観て、この先生に診ていただきたいと強く思いました。上映後、映画館前で、先生に甲子園でも診に来ていただけるか声をかけさせていただいたところ、「いいですよ」と快く答えてくださったので、クリニックに伺いました。

詳細を説明するまでもなく、父が経鼻胃管（中心静脈に切り替えて管は外すと聞いていました）と中心静脈点滴の2つの管につながれていることに、先生は、「何でそんなことになってんの！」「すぐに脱北させて、家に連れて帰ったり！」「病院と家族の無知の責任。かわいそうすぎる！腹が立ってきた！」と怒ってくださいました。先生は真に患者の身になって考えてくださっている、信じられると確信しました。

ご相談に伺う前は、長尾先生に診ていただけるまで、一旦他の病院に転院し在宅看護の準備をして…と悠長に考えておりましたが、先生の一言に背中を押していただき、数日後に自宅に連れて帰ることができました。

状態がよくないことは承知していましたが、まさか一週間も経たないうちに逝ってしまうなんて思いもしておりませんでしたので、まさにギリギリのタイミングでした。先生の一言がなければ、家で父の最期を看取ることはできませんでした。今もあの時こうしておけば、ああしてあげればよかったという後悔を数えたらきりがありませんが、もし父があの病院で最期を迎えていたら、私たちは立ち直れない後悔に苦しみ、押しつぶされていただろうと思います。

自宅に帰ってきた時、父の口の中は全体に乾いた血がついた状態でした。えっ！何の血？　口腔ケアをしていただいていたはずなのに何で？　と驚きながら、すぐに口の中をきれいにしました。先生が来てくださって、本人に確認しながら外された鼻のチューブの先に血がついていて、「胃の中で出血してるわ」と言われて理由がわかりました。血が逆流していたのにケアをしてもらえていなかったと思うと、病院でどれほど辛かっただろうかと、父に申し訳ない思いがこみあげてきました。

その後、本人の口から「　　病院の院長に、死ぬような体にされた」という言葉がはっきりと出た時、「あんな病院に行かせてごめんね」と泣きながら何度も謝ると、「過去のことは振り返るな」と言ってくれました。

チューブを外していただいた後、先生のご指示で小さく砕いた氷を半年ぶりに口に入れた時の父の顔が忘れられません。入院当初は、「キューッと冷たいビールが飲みたい」「清涼飲料水を買ってきて」「赤飯を食べてる夢をみた」等言っていましたが、転院後は、会えないこともあって何も言わなくなっていました。歩行器で歩いていた十二月には、自販機でグリーンダカラを自分で購入したところ、看護師さんに見つかって取り上げられてしまい、飲めなかったということもありました。後で「飲めるのに…」と本人は言っていました。水一滴も飲ませてもらえず、どんなに辛かったことでしょう。最後に、カラカラに渇ききった喉を冷たい氷で潤し、大好きなアイスクリームをほんの少しでも口にできて、本人も私たちも本当にうれしかったです。チューブを外していただけたからこそ、味わえた喜びだったのです。

自宅に帰ってきたからこそ見られた、本来の父らしい姿もありました。

ＴＶの国会中継を見ながら「腹立つ」と言い、地震があった日の翌朝は「地震どうなった？」と聞いていました。私たちが枕元でワイワイ言っていると「静かにしてくれ。わしは今、さ迷うとる」「さ迷ってたらアカンやん。もっとにぎやかにするわ」。「お礼を言いたい人が三人いる。顔は浮かぶが名前が出てこない」「父さんが事業立ち上げる時に助けてくれた人なら、もう先に逝ってはるから、お礼はもっと後でいいよ」。「母さんを病院に連れて行って」と母の心配もしていました。

毎夜、眠ってからも違う姿を見せてくれました。

一日目の夜中、みんなを呼んできてほしいというので、ベッドのまわりに集合し、父が何を言おうとしているのか一生懸命聞きました。「もし、わしが…」「えっ？あしが？」「もし、わしが金曜日に…」「あしが…？」ようやく「もし、わしが金曜日に」と聞き取れた時には、父は疲れて寝てしまいました。その夜は、みんなでベッドを囲むように寝ました。

二日目は、寝ながら両手指をきれいに揃えて「ぱくっ、ぱくっ」と何か食べるようなしぐさをしました。おにぎりかお饅頭を食べる夢を見たのでしょうか。

入院中に電話で、「クリスマスやから、あんたらピザ買って食べ」と言ったことがありました。ピザなんて数えるほどしか食べたことがなかったのに、チーズがビヨーンと伸びるピザを美味しそうに食べるＴＶコマーシャルを繰り返し見て、美味しそうだなぁ、食べたいなぁと思っていたんだろうな。何も言わなくなっていたけれど、ずっと口から食べたいなぁと思っていたのだと思い、また涙しました。

三日目は、大好きだった車の運転をしているのか、ハンドルを回すように手を動かし、アクセルを踏むように脚を動かしていました。八六歳でパーキンソン病と診断されるまで、ずっと無事故で老人の暴走族？　と言われるくらい達者に運転していた父でした。免許返納手続きをしてからも、無理矢理返納させられたと、ずっと怒っていました。死ぬ時は金のキャデラックを運転して逝く、といつも言っていたのを思い出しました。

四日目の夜中には、かさかさとなる音に気付いて起きてみると、父はおむつを全部外してしまっていて、手で前をしっかり隠していました。「お父さん、おむつしとかないと」「いやや」「[illegible]さんと[illegible]さんに言うよ～」「言え～」「どうするかは明日相談しよう。今はとりあえずおむつしとこうよ」「いやや」というやり取りを一時間以上繰り返し、気づいたら本人は眠っていました。ふらふらになりながら説得していた私たちは、大笑いしました。

排尿の意識がはっきりあるのに、おむつの中でしなければならなかったここ数カ月の父の苦悩を思い知らされた時間でした。リハビリパンツは入院して初めて使用することになり、　　では熱を出している時以外は、個室のトイレを使用していました。転院後もしばらくポータブルトイレを使用していましたが、動かれると手がかかると判断されたのか、患者の意思に関係なく、おむつのみの対応に切り替えられ、決まった時間にしか対応してもらえなくなっていたのです。尊厳をないがしろにされ、本人は深く傷ついていたのですね。

五日目の夜は、眠りながらパジャマを脱ごうとし始めました。死期が近づくとそういう行動をとるようになると、長尾先生が本に書かれていたなぁ、やはりそう長くは生きられないのかぁ…と、また涙しました。

亡くなる当日は、午前中に[illegible]　さんの優しい看護を受けました。そして、リハビリの先生が予定がいっぱいにもかかわらず調整してくださって、明日来てくださると聞いて喜んでいました。[illegible]さんからは「明日よかったらお風呂に入りますか？」とお電話をいただいて、本人も嬉しそうに「うん」と頷きました。ヘルパーさんが帰られる時は、にっこり笑って手を振って挨拶をしました。

夕方から、父の息が浅く早くなってきたような感じを受けた母は、『けったいな町医者』で長尾先生が患者さんの心臓をさすっておられたのを覚えていて、「もうすぐみんな帰ってくるからね」と言葉をかけながら父の心臓をさすって

いたようです。仕事から帰って、父の顔に蒸しタオルをあてて「熱い？」と聞くと頷き、膝に挟んでいたクッションを外してほしいと言ったり、ずっと意識ははっきりしていました。「父さん、しっかり息してよ」「良くなって、　病院の院長を見返すんでしょ」「父さん、がんばって」と、からだをさすりながら声をかけ続けていましたが、下顎の方から少しずつ肌が黄色くなっていきました。そんな状態で、父は、一生懸命大きく口を開けようとしながら「あ・あ・あり・あり・ありが・ありが・ありがと」と言ってくれました。目からは、つぅーつぅーと細い涙が流れていました。私たちは、「お父さん、お父さん」と繰り返すばかりで、父のありがとうに、ありがとうと応えられたかどうかを覚えていません。

私たちからの連絡で　さんが来てくださった時には、父はすでに息をひきとっていました。ただただぼーっとしている私たちに、　さんが「きれいにして、服を着替えさせてあげましょう。今できることはそれだけですから」と言ってくださいましたが、すぐには動けず、何度か促してくださってようやく…という感じではなかったかと思います。父に声をかけながら、　さんが丁寧に丁寧にエンゼルケアを施してくださいました。葬儀場の方にも火葬場の方にも、「きれいなお顔ですね。こんなにきれいなお顔で亡くなられる方は、なかなかおられませんよ」と言っていただけたのは、　さんのケアのおかげだと思っています。

父は、入院してからも生きたいという強い思いを持ち続けていました。「障がい者仕様の家を探しといて。あんたらも歳いくし…」と言い、何度か繰り返す高熱も乗り越えていました。リハビリをして家に帰りたいという意思も持っていました。でも、　の難病センターの担当者は、「九〇歳ですよ。鼻チューブで、九〇歳。リハビリなんてできませんよ」と断言し、転院受入れ病院は療養病院一つしかないと言いました。父がその病院は絶対に嫌だと言いましたので、　病院を候補にあげましたが断られたと言われました。事前に、　病院に家族で話を聞きに行った時には、鼻チューブの方も受入れておられ、パジャマから服に着替えて過ごすと聞き、日常生活ができるような入院生活の態勢だから、家にもはやく帰ってこられるかもしれないと思い希望を出しましたが、叶いませんでした。

鼻チューブで九〇歳の老人は、生きたいと望んではいけないのか！　これだけ沢山病院がある中で、紹介できる病院が一つしかないなんてどういうことなんだ！　病院同士の申し合わせでもあるのか？　と納得できませんでした。しかし、転院をせかされていたので、何とか家族で探した　病院に転院しました。

一度は、リハビリをして声も少し出やすくなって、電話でも声がはっきり聞き取れるようになり、歩行器で歩いていましたので、本人だけでなく私たちも

少しずつでも良くなるという期待を持ちました。しかし嚥下検査後、リハビリはほとんどしてもらえなくなり、さらに一般病棟から一方的に療養病棟へ移され、常時おむつをされ寝たきりにされてからは、家族とも会えず、声も出なくなっていきました。電話で意思を伝えることもできなくなっていく中で、父は諦めるしかなかったのだと思います。

病院で「死にたい」と言った父が、長尾先生とお会いできたことで「がんばりたい」と言ってくれた時は、良かった！　ようやく人として大切に診ていただける！もう少し一緒にいられる！　と望みを持ちました。父も、この先生なら、もしかしたら…と希望が持てたのだと思います。

長く多くの在宅患者さんを看取ってこられた先生は、父の状態は一週間か二週間が山場。何カ月単位ではないと判断されていましたが、父の思いをくみ取って、本来なら投与されない点滴治療の予定もしてくださいました。先生のお気持ちに応えられず、父も無念だっただろうと思います。そして、もしもっと早くお出会いできていたら、ひとひねりした冗談が好きだった父ですから、先生との会話を楽しむこともできたのではないかと思うと、残念でなりません。

短い期間でしたが、[illegible]さん、[illegible]さんの看護を受けることができ、父は大変喜んでおり感謝しておりました。声が出ないので言葉でお礼を伝えることができませんでしたが、帰られる時はいつも両手をあわせていました。

病院で退院準備をしている時、三～四人でガサガサっとおむつを替える場面に出くわしましたが、お二人がおむつを替えてくださる様子は、全く違っていました。常に声をかけながら、父の体にゆっくりと触れ、慈しむように背中をさすりながら体の向きを変え…。こんなにも違うんだと驚きました。丁寧にシャンプーをしていただいたり足を洗っていただいたりしている時、きれい好きの父は本当に気持ちよさそうにしていました。

看護の一つひとつが、徹底して看護を受ける側に寄り添ったやさしく行き届いたものでした。お二人の方からいろいろ学びたいと思っておりましたのに、父がはやく逝ってしまったのでその時間がありませんでした。私たちが在宅看護を受ける時もお二人にお願いしたい、本当にそう思いました。

本人と家族の思いを、しっかり聞き取ってくださったことも忘れておりません。リハビリをしたいという父の望み、暖かくなったら車椅子でお花見に行こうと話していたこと、お風呂が好きだったということ、どれも実現してあげようと計画してくださいました。残念ながら、実現できないまま父は逝ってしまいましたが、そのお気持ちをありがたく受け取らせていただきました。

長尾先生、[illegible]さん、[illegible]部さん、[illegible]さん、スタッフのみなさま、ＤＶＤを作成してくださった[illegible]さん、みなさまのきめ細やかなお心づかいを思う度、今も胸が熱くなるほど感謝いたしております。父は最期に、みなさまのあたたかいお心に包まれて、旅立つことができました。

自宅に帰ってきた日に、先生に「病院出られてよかったね」と聞かれて父は頷きましたが、「家に帰ってこられてよかったね」という質問には「いや」と首を横に振りました。自身の体の状態がわかっていたので、家族に迷惑をかけたくないと考えての返事だったと思います。その思いもあって、はやく逝ってしまったのかもしれません。

半年以上、生きたいという強い思いでがんばり続けたけれど、もうだめだと諦め、またがんばりたいと希望を持ち、父は一生懸命生ききったと思います。そして、最期は自身の死を受け入れ、覚悟を決め、潔く旅立つことができたと思います。

後悔が尽きないのは、私たちの方です。チューブを拒否して、家に帰った方が良かったのかもしれないと考え続けています。いつ窒息死するかわからないと言われ、病院の言いなりになってしまったこと、私たち自身の無知を悔やまない日はありません。

でも、父が逝く前に、長尾先生やスタッフのみなさまのように心から命を尊んでくださる方々にお出会いできたことで、入院生活で深く傷ついた父の心も、父に充分なことができていなかったと思い悩む私たち家族の心までも、癒していただきました。父との濃密で貴重な時間を作ってくださり、本当にありがとうございました。心からお礼申し上げます。

感謝の気持ちをうまくお伝えできず、大変長くなってしまいました。申し訳ございません。

最後になりましたが、長尾先生とみなさまのご健康とご活躍を心よりお祈りいたします。そして、これからもずっと応援させていただきます。

家族一同

二〇二二年十月